



当 時の近所のジムカーナの店の犬は、よく入口のところにちょこんと座って通りを見ていた。散歩する時も飼い主はリードを付けて

なくても、ちゃんと横について歩いています。名前は「サスケ」。前に僕が飼っていた雑種の犬に似ていた。〈2005年11月号〉

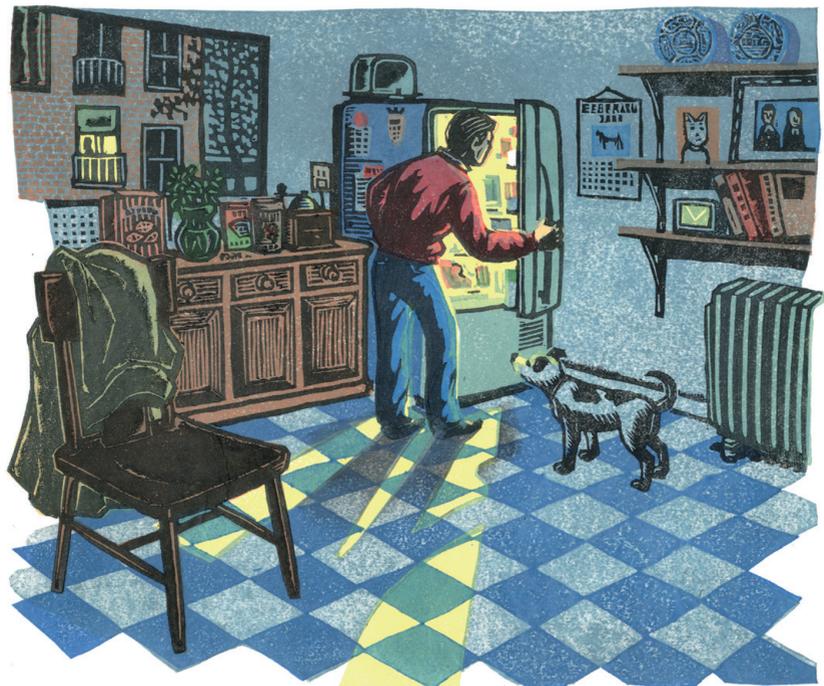
Originally
November
2024

35

オリジナル

散歩の途中に 森英二郎

「小説新潮」表紙絵より／2002年11月号～2006年5月号



初 めて新品の冷蔵庫を買ったので、なにか冷蔵庫をテーマにと思い真夜中の台所の絵を描きました。この号が出たあとサンフランシ

スコに住んでいる姉が、こっちの紀伊國屋書店で見たよ、あなたの絵よかったよ、と電話をくれたのでびっくりした。(2003年2月号)

散 歩の途中によく前を通る花屋さん。運よく店先に置いてあるカゴの中にレトリバーの子犬がいるときはいつも頭をちよっとだけ撫

でさせてもらった。この店できっと近所の修道院の尼僧さんたちが花を買っているのを見かけたことがあります。(2003年12月号)



ビー・グラフィックスの事務所が西早稲田にあった頃、よく見かけた都電荒川線の路面電車と面影橋です。ここを通るたびにな



カロックバンドはつぴいえんどのアルバム『風街ろまん』の中の「風をあつめて」という歌を思い出してしまします。(2002年12月号)



「5月 月蝕」と書いて「うるさい」と読むのが面白いと思って、マンションの台所の窓から見える景色と飛んでるハエを描きました。こ

の3階の部屋に引越してから蚊はいなくなっただけで蠅は出る。この蠅は得意の輪ゴム鉄砲で撃ち落としました。(2006年5月号)

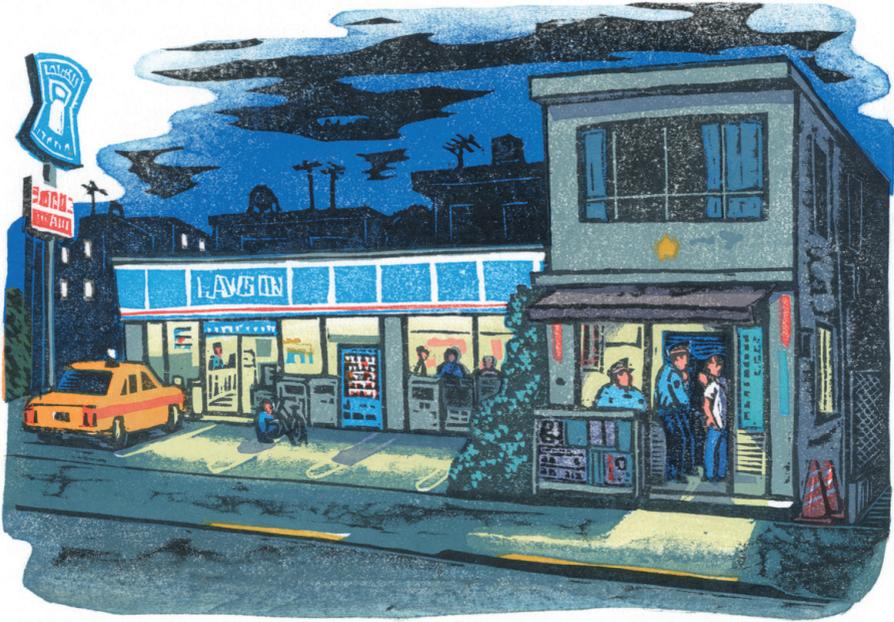
以前、経堂の古本屋で有名なイラストレーターの画集を見つけた。最後のページに鉛筆で書かれた著者のサインのあとに〇〇さん



へ、と書いてあったところが消しゴムで消してあった。よく見るとその鉛筆の跡は某有名音楽評論家の名前でした。(2002年11月号)

大好きなアメリカの画家エドワード・ホッパーの描いた映画のワンシーンのような絵を、木版画で模写して個展をしたこと

があります。僕はこの「小説新潮」でテレビのドラマのような俗っぽいシーンをかっこよく描いてみようと思いました。(2003年4月号)



今では考えられないけれど以前はイラストを発送するために、よく真夜中のコンビニへ行ってた。トゥデイ便というのがあって、都内で

あればその日の2時以降には届けてくれた。イラストを送ってホットした後食べるソフトクリームが美味しかった。(2005年8月号)



白樺派の人たちが住んでいた、千葉県我孫子市の手賀沼というところに取材に行った時、雑木林に囲まれた手賀沼の遊歩道などを歩

いて探してみたけど、白樺は生えてなかった。やっと武者小路実篤の旧宅のそばの中学校の庭に5、6本生えていた。(2005年10月号)



マイルス・デイビス
Miles Davis
1926-1991

60年代の半ば梅田のジャズ喫茶「チェック」によく通ってた頃、マイルス・デイビスはすでにたくさんのレコードを出していて「モダン・ジャズの帝王」と呼ばれていました。50年代に録音された「ラウンド・アバウト・ミッドナイト」「サムシン・エルス」や「カインド・オブ・ブルー」などがよくかかっていてどれもクールでカッコよかった。今、僕のパソコンの中に一番たくさん入っているのは多分マイルス・デイビスだと思う。持っているCDは「カインド・オブ・ブルー」とヒップ・ホップの人との共作「ドゥー・バップ」だけですが、図書館のCDコーナーには昔のクールなアルバムから70～80年代のエレクトリックでファンクなマイルスまでいっぱいあります。さすが「モダン・ジャズの帝王」である。

森英二郎
思い出のクリフォード ㊶

もり・えいじろう 1948年、京都府生まれ。関西のタウン情報誌「プレイガイドジャーナル」の表紙、野外コンサート「春一番」ポスター、『荷風と東京「断腸亭日乗」私註』（川本三郎 著）、絵本『おとうさんのうまれたうみへのまちへ』など。

おおにし・よしとか 1974年、京都府生まれ。京都嵯峨嵐山にある古書店London Books店主。文芸書を中心に、人文書、美術書、絵本、サブカルチャーなどを扱う。観光客と地元の人に支えられ営業を続ける。

日日読書
大西良貴

London Books
616-8366 京都市右京区嵯峨天龍寺今堀町22

32

第一作から読み続けているオーケンのエッセイ、久々の新刊。もともと彼のエッセイは書かれる出来事がどこまで本当かわからないところがあったが、本作はフィクションの要素が強まり幻想私小説でもある。

弊店のお客さんI君は二十代のマンガマニアで、いつもたくさんのマンガを買っていたが、ある時うちでめずらしくも買った小説がオーケンの『グミ・チョコレート・パイン』。見事にどハマリし、それからというものオーケンの小説とエッセイを次々読破、のみならず、オーケンの本によく出てくる中島らも、寺山修司、乱歩、中也等にも手を伸ばし、この半年間ですっかり読書家に変じた。

そんな彼に先日「オーケンの新刊買った？」と問うと「当たり前じゃないか！」との熱い返事。書店で予約して購入、もう読み終わったという。オーケンを知ったばかりの二十代半ばと、とうの立ったファンの五十歳が同じ新刊を先を競うように読む……オーケン偉大なり。



大槻ケンヂ
『今のことしか書かないで』
ぴあ/2024年

金子兜太

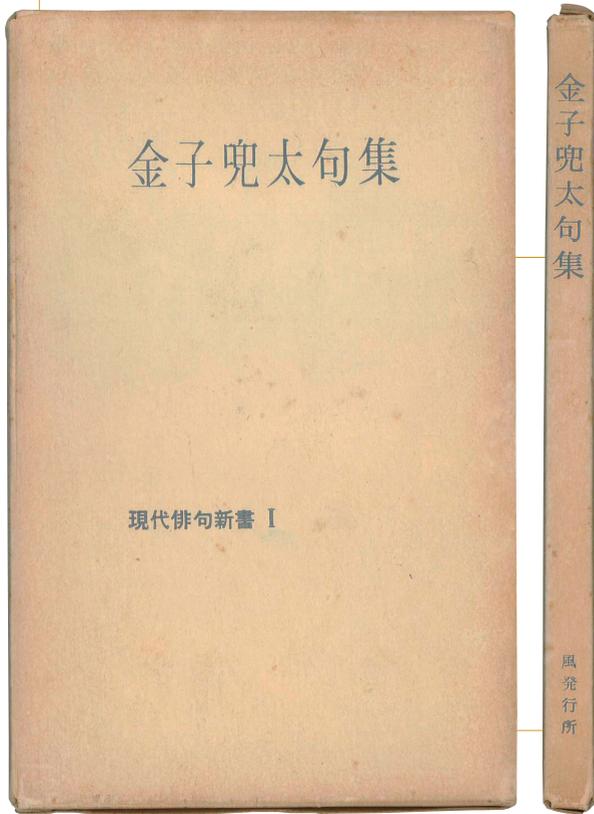
第二句集。甲府市の山梨県立文学館「金子兜太展」を鑑賞、座談会（高野ムツオ、高山れおな、佐藤文香）を聴く。座談会のテーマは「第一句集『少年』・第二句集『金子兜太集』を中心に」。予習に第二句集（1996）

を入手。これは「句集『少年』をまるごと前半で収録。後半は神戸・長崎、それに東京に戻ってからの新たな作品三百一一句（酒井弘司『金子兜太の二〇〇句を読む』）を足した句集。風発行所刊。1946年から沢木欣一が同人と発行した俳誌「風」の出版社。〈句集「少年」をだしてから、六年たつた。今度は「少年」の全部と、それ以後のものを残らずまとめて、約八百句を一冊にした。「少年」以後のものは、神戸の頃の後半（三部・神戸に所収）と長崎の全部（四部・長崎）、それと東京に戻ってからのもの（四部・東京）である。（略）沢木欣一は、「少年」は絶版になっているし、案外読んでみたいという人も多い。それに初期の抒情も捨てがたい——全部まとめみたらどうか、と奨めてくれる。（略）俳句を作りはじめてから今までの二十年余の遍歴を、ここでさらけだし、読んで貰う人たちの批評に委ねてみるの方がよい。（あとがきより）。

『少年』（1955）は並製四六判、180頁、1頁三句組・天地揃え。（昭和十五年から三十年（兜太二十一歳から三十六歳）までの十五年間の句業をまとめたもの。四九七句を収録。——『金子兜太の二〇〇句を読む』。こちら『金子兜太句集』は新書版で函入り、本文188頁。函はボール紙で簡素なもの。表にタイトル「金子兜太句集」と「現代俳句新書I」のみ。背はタイトルと風発行所表題は、表・背ともに手書きの明朝体のレ

タリング、シリーズタイトルはゴシックの活字。タイトルレタリングが、悩ましい。ほぼ同じデザインで表は長体、背は正体。写植のような機械的な変形ではなく、書かれたものと想像する。よくできているが一字ごとのバランスは必ずしもよくはない。背と表を比較すると、漢字のエレメントに少し差異がある。顕著なのは兜太と集のハライの長さの違い。（つづく）

メモランダム・本のデザイン 26
金子兜太句集 その1
(風発行所/1961年)
日下潤一



金子兜太句集

金子兜太句集

風発行所

現代俳句新書 I

め ずらしく電話が鳴った。固定電話であ
る。

男性の声が、こちら成城警察といった。
「今年に入ってから、管内で振り込み詐欺が
急増しています。すでに六十件、被害は数千
万円です。被害は固定電話のある家はかりな
ので、注意を喚起しています」

これも詐欺かと思ったが、それでもなきそ
うだ。私は大丈夫です、といいかけてやめた。
必ずしも大丈夫ではない。

もうだいたい以前のことになる。やっぱり午
前中に固定電話が鳴った。相手は女性、四十
年来の友人だった。

彼女はいった。
「ジュン君なんだけどね、ちよつと大変なの
よ」

やはり四十年来の友であるジュン君はテレ
ビドラマの独立系プロデューサーで、いつも
多忙で汗をかいている。私たち三人は、だい
たい二カ月に一度会い、ちつとも上達しない
ビリヤードをする。そのあと、ビアホールで
一杯ずつビールを飲んで別れる。そんなこと
を長いあいだつづけていた。

「ジュン君が、借りたパソコンにコーヒーを
こぼしちゃったというの。一杯分まるごと」
「それは大変」

「データが全部死んじゃって、回復できない
んだって」
「で、どうする？ 弁償？」
「そうなのよ。先方はいくら欲しいとはいわ

ないらしいんだけど、ジュン君は五百万くら
いじゃないかと」

彼ならやらかしそんなことだ。私は「五百
万」と何度かつぶやいた。大金だ。本人は出
せないだろう。借りるにしても……

彼女はつづけた。

「借りるにしても、金額はとて無理だろう
ね。協力できても、あたしの場合はいざい
百万。すぐセキカワ君に電話してみる、とい
つといたんだけど」

「あなたの百万なら、オレは百五十万かな」

「その差は何？ 男だから、とか？」

短い時間のうちに出した回答は、二人で損
害の五割を負担する。とても痛い、まずこ
んなところではないか。

じきにジュン君から電話があるから、その
とき振込先を聞いてそちらに知らせる、と彼
女はいった。

しかし電話はなかったのである。翌日業を
煮やした彼女がジュン君に電話したら、そん
な話は知らない、と大いに驚かれた。

では振り込み詐欺？ 当時はオレオレ詐欺

と呼ばれることが多かったが、しつかり者の
彼女が引つかかった。いばげん騙されにくい
彼女が騙され、連鎖的に私も騙された。

その後、犯人からの電話がなかったのは、
話がうまく転がりすぎて逆に警戒されたので
はないか。それが私たちの見立てだった。

電話でジュン君本人は名のついでない。あ
ら、ジュン君、声が暗いわよ、どしたの？

関川夏央 昭和残照 振り込み



と彼女に問われ、事のあらましを語っただけ
だという。彼女は自分の負担額を内心で決め
たと、すぐに私に電話した。私も自分の額
を、勇を鼓してその場で決めた。あとは振込
むだけだった。

次のビリヤードの会のあとのビアホールで、
ジュン君は、騙されなくてよかったが、君た
ちの友情に感謝する、友情の計量化のリアリ
ティにも感謝する、といった。

成城警察の男は、固定電話には出ないでく
ださい、常時留守電にして、相手の発語を聞
いてから判断してください、といった。はい、
と私はこたえた。御しやすい老人だと思われ
がちだから、固定電話はもうやめた方がいい
ですよ、とまで彼はいわなかったが。

せきかわ・なつお 1949年、新潟県生まれ。作家。代表作に『海峡を越えたホームラン』（双葉社／第7回講談社ノンフィクシ
ン賞）『坊っちゃん』の時代』（双葉社／谷ロジローと共作・第2回
手塚治虫文化賞）、近著に『人間晚年図巻』シリーズ（岩波書店）。

続

ぼくの映画館は家から五分

33

伊野孝行

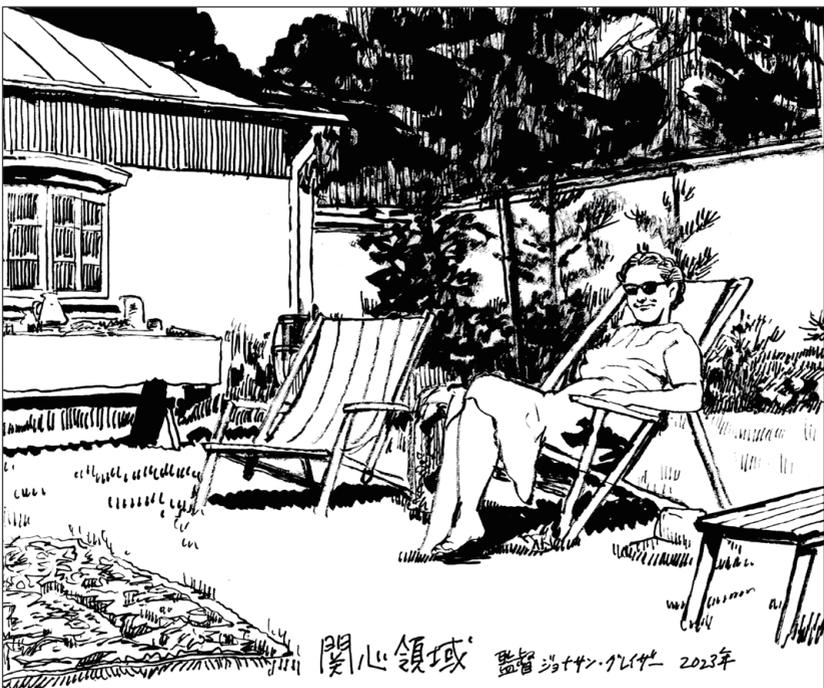
一 十代の終わり頃、強制収容所から奇跡的に生還し
たユダヤ人、ヴィクトール・フランクルの著書
『夜と霧』を読んで顎関節症になった。あまりの凄惨な内
容に無意識に歯を食いしばっていたせいだろう。後年、
同名のアラン・レネのドキュメンタリー映画で見た恐ろ
しい映像は死ぬまで忘れない。

『関心領域』はアウシュヴィッツ収容所の隣に住む所長
一家の話である。手入れの行き届いた庭のある（温室もブ
ールもある）邸宅は妻の自慢だ。何もなかった野原に作っ
た理想の家。辺には美しい自然が広がり、子育てにはも
つてこいの環境……隣の収容所からは風に混じって悲鳴
や銃声が聞こえるが、でもユダヤ人を殲滅するのは良い
ことだとドイツ人家族は「認識」している。

人間の認識力がテーマだ。収容所の中の出来事は一切
描かれない。泊まりに来た妻の母はナチスに洗脳された
良識あるドイツ人だが、夜通し燃える焼却炉の炎を見
て夜のうちに帰ってしまった。理性で行われたホロコー
ストからは拭いても取れない黒い脂のようなものが浮き
出てくる。妻は夫の転勤の知らせに取り乱す。夫は転勤
にどこかホッとしたのだろうか職場で吐いた。

終盤、現在のアウシュヴィッツ収容所で働く清掃員の
映像が挟まれる。犠牲者の遺物の山を前に淡々と働く。
彼らの日常と認識の揺れを、遠く離れた客席で想像した。

い・たかゆき 1971年、三重県生まれ。イラストレーター。第44回
講談社出版文化賞、第53回高橋五山賞。著書に『画家の肖像』『となりの
一休さん』などがある。テレビアニメに『オトナの一休さん』。最新
刊は南伸坊さんとの対談本『いい絵だな』。個展「歩いてるうちになん
となく」（軽井沢町・酢重ギャラリー／10月11日～11月5日）開催。



関心領域 監督 ジョナサン・グレイサー 2023年



霜田あゆ美 Portrait of My Love

短期連載

上

ガザ への空爆のニュースに耳が慣れてしまっているような気がする。恐ろしい。パレスチナ人の映画監督エリア・スレイマンは今をどう見ているだろう。2019年公開の『天国にちがいない』は「パレスチナに捧ぐ」と結んで終わる。映画は風刺や皮肉がユーモアに包まれ描かれているので、中東問題を横に置いて映像や演出をおもしろく見られる。先日、配信で見返したら、主人公であるスレイマン監督がパリのカフェでぼーっと人々を眺める場面がかかっていた曲が「I put a spell on you」だった。ニーナ・シモンのカバーだったので、うかつにもスクリーミン・ジェイ・ホーキンスのあの曲だと気づいていなかった。

1986年の春、ジム・ジャームツッシュ監督の『ス

トレンジャー・ザン・パラダイス』を見た。地獄の底で喚き叫んでいるような「I put a spell on you」を大好きになった私は雑誌の記事を目にして、1989年初夏、渋谷クアトロでのライブに行った。棺桶の中から頭蓋骨の付いた杖に現れたスクリーミン・ジェイ・ホーキンスは、ステージの上で何度も火を吹いていた。炎を見ては友だち（会社の同期）と大はしゃぎ。知ってる曲は一曲だけなのに。ライブが終わり、はぐれてしまった友だちを入り口で待っていたら、違う友だち（こちらも会社の同期）が出てきて大笑い。せっかくだからと三人でお酒を飲んで帰った。おもしろい夜だった。

I put a spell on you おまえに魔法をかけてやる

しもだ・あゆみ 1967年、神奈川県生まれ。イラストレーター。画材店いづみや（現Tools）に社員として11年間勤務後、2000年より絵の仕事始める。2007年、HBファイルコンペの日下潤一賞を受賞し、それを機にアルバイトを辞め現在に至る。

驚愕 のルポに出会った。ブレイン・ハーデン『北朝鮮 14号管理所からの脱出』（白水社）。ワシントンポストの元支局長が82年生まれ脱北者シン・ドンヒョクの証言をもとに、北朝鮮の収容所の実態、奇跡的な脱出と逃避行、脱北後の苦悩をまとめた。

強制収容所体験者の証言は珍しくない。幸福な生活から連行され、収容所の過酷な生活に放り込まれる。しかしシンのように収容所で生まれて育ち、「収容所が我が家」という特異な境遇は聞いたことがない。初めて明らかになるシンの話は驚きの連続だ。

収容所には金日成、金正日の写真はない。「主体思想」も教わらない。学校では基本的な読み書き、計算（足し算引き算のみ）。地理、国境を接する国々のこと、歴史、指導者についても習わない。収容所の規則は徹底的に教え込まれる（教師は腰のホルスターに拳銃！）。

なぜシンは収容所で生まれたのか。囚人の男は25歳、女は23歳になると労働のあった者のみ、〈報奨結婚〉させられる。相手は選べない。そして連続五夜、同衾を許される（その後男は男子寮へ。年に数度会うのみ）。

シンには入寮して交流のない兄が一人いる。子供は親の罪によって囚われており、〈逆者の血〉が流れていると保衛員（看守）に繰り返し教え込まれる。そして親や他の囚人の規則違反の密告が強く推奨される。

14号管理所は〈完全統制区域〉なので、高圧電流が流れる張り巡らされたフェンスの外に一生出られない。食事は三食ともトウモロコシ粥、白菜汁。ベッド・椅子・テーブル、水道もない部屋で（床に寝る）、シンは母と二人で暮らしていた。常に空腹。母の食事を盗む。母は殴る。それでも盗む。仕事は過酷な重労働。便所掃除に糞尿集め（必須の肥料）、炭鉱、ダム工事、農場、製縫工場など。

シン十三歳の時、母と兄の脱走計画を密告、二人の処刑を父と眼前で見せられる。それがその後シンの強いトラウマになる。外の世界をよく知る囚人・元高官バク・コン Chol と知り合い、外への思いが募る。バクと脱走、先にフェンスを潜ったバクが感電死、その体を絶縁体にシンは脱出する。外は飢餓で食料を求める人たちが溢れ、盗みが常習の浮浪者たちに混じりシンは生き延びる。どの国境警備員も貧しく飢えており、用意の煙草や菓子も撤くと身分証なしで中国に入った。

中国の牧場でこき使われた後、成都へ。韓国系教会に助けを求め仕事を探し、上海に流

れて偶然韓国メディアの特派員と出会ってよく領事館にたどり着いた。

韓国で脱北者の避難所・ハナ院で生活を始めるが、収容所の悪夢は消えない。支援者を頼ってアメリカ・カリフォルニアへ。しかし中々生活に馴染めない。英語を学ばず、頭なりに朝鮮語を話し続ける。シンの苦悩の深さに胸が痛くなる。

以前一度自伝を書いたが（売れなかった）、その時は自分の密告で母と兄が処刑されたと明かさなかった。今回初めて重い口を開いた。本書では自伝の記述と真相の告白が、二章にわたって記されている。シンのいつまでも拭い切れない深い心の傷が、そこにあるのは間違いない。

シンが脱出に失敗していれば、いまだに誰もシンの存在もその激しく歪められた半生を知らない。この体を張った命がけの記録は、今まで経験した事のない強度で読者を揺さぶる。

シンの決して快癒しない傷に、ただ暗然とするばかりだ。

N'S COLUMN

37

西岡琢也

収容所で生まれて
育って、逃げた

にしおか・たくや 1956年、京都府生まれ。脚本家。代表作に『ガキ帝国』『TATTOO 〈刺青〉あり』『沈まぬ太陽』『はやぶさ〜還かなる帰還』、TVドラマ『京都迷宮案内』シリーズ、『返還交渉人』など。

Delft (デルフト) で18世紀中頃に作られたファイアンス陶器。9月に訪れたオランダから持ち帰った器のなかで、特にお気に入りの一枚です。「かつてデルフトには30から40ほどの製陶工場があったんだよ。今のところ正確に分かっている数は33だけだね」と私に教えてくれたのは、ハーマンさん。このお皿の以前の持ち主で、イタリアが大好きと目を輝かせておっしゃるオランダ人ディーラーです。

16世紀初頭からオランダを含むネーデルラント地方では、イタリア人の陶工が移り住み製陶所を創設しました。彼らが作る装飾性豊かな色絵陶器はMajolica (マヨリカ陶器) と呼ばれ、豪華な日用の器として人々を魅了します。当初、その中心となったのはアントワープ (現ベルギー) でしたが、マヨリカ陶の技術を持った陶工たちがさらに北ネーデルラントへ移住するようになったことで、オランダでの製陶が発展していきました。そして17世紀中頃にはデルフトがその拠点として名を馳せます。また、オランダでは17世紀初頭から大量の磁器が中国や日本から輸入されるようになっていました。つややかで美しく、薄手ながら丈夫な磁器は、ととても魅力的に見えたことでしょう。高値で取引される磁器に対抗するため、陶工たちはマヨリカ陶にさまざまな改良を加えます。そうしてようやくできあがった、まるで磁器のように見えるオランダの陶器がFaience (ファイアンス陶器) でした。(part.2につづく)



直径22.5cm 高さ2cm

ウンベルト Umwelt Textiles & Objects
604-0962 京都市中京区夷川通御幸町西入達磨町588-1

うおずみやすこ
1977年、兵庫県姫路市生まれ。Umwelt Textiles & Objects店主。学生時代にテキスタイルを学ぶため、デンマークへ留学。帰国後、古美術店に勤めたのち2012年、京都・夷川通にUmweltを開く。

Originally November 2024

35

オリジナル

今号と次号、霜田あゆ美さんに短期連載をお願いしました。霜田さんの好きな人を描いてもらいます。気分

を上げるため、YouTubeで「I put a spell on you」を聴きながらレイアウトを仕上げた。秋から冬に向かっていく今の季節に似合う曲。文化の日、軽井沢・酢重ギャラリーの伊野孝行さん個展へ。伊野さんの絵に人物がないのは新鮮。伊野さんの実家周辺の風景がよかった。海のある町の、すこし寂しく静かな景色。軽井沢駅から伸びるまっすぐな道は、紅葉が美しく、観光客で賑わっていた。(赤波江)

連載に書いた、座談会(高野ムツオ、高山れおな、佐藤文香)を聴くついでに見た、甲府市の山梨県立文学館の「金子兜太展 しかし日暮れを急がない」はとてもよかった。日本近代文学館の「編集者かく戦へり」、樋口一葉から中上健次まで、作家と編集者の手紙やゲラのやりとりが面白く抜群の展示。本誌でお世話になっている霜田あゆ美さんの久しぶりの個展「あんのんと暮らす」(HBギャラリー)、布を縫い合わせる作品が素敵。天才です。フィリップ・ワイズベッカーの「RANDOM PICKS」展(888ブックス)。身の回りに面白い形を見つけて、82歳になっても衰えぬ彼の好奇心と新しさに刺激される。(日下)

今月のあとがき

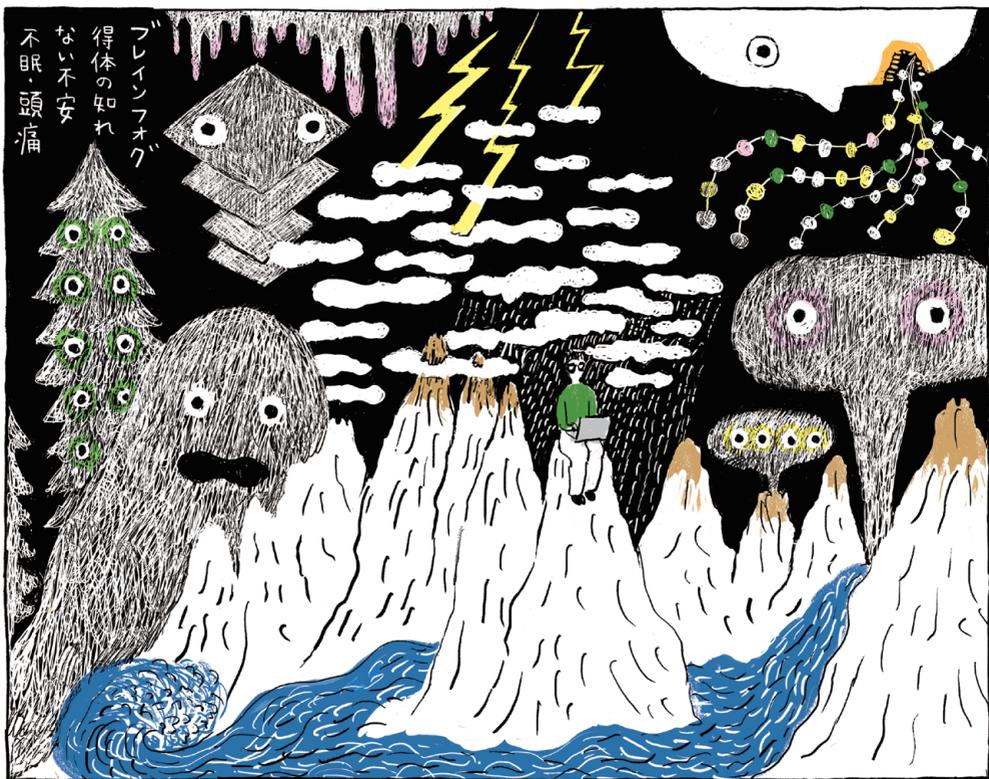
2024年11月15日発行 <ロゴデザイン>ヨコカク <編集・デザイン>赤波江春奈+日下潤一 <印刷・製本>グラフィック <発行>ビーグラフィックス ©B GRAPHIX 2024, Printed in Japan 【無断転載禁止】 お問い合わせ = akabae@bgx.jp

◆Web = bgraphix.com ◆Twitter & Instagram = @bgx_book_design ◆日下潤一のブログ = www.bgx.jp/blog/ 「オリジナル」はBGXが毎月発行するフリーペーパーです / 100部発行

◆ロンドンブックス(京都・嵐山) ウンベルト(京都・夷川) フラヌール書店(東京・不動前)に10部ずつ、今号から古瀬戸珈琲店(東京・神保町)に5部、置いています

E.Mori





今年のハロウィン
ミストのドーナツを食べた。
おぼけ 仮装は
しなかつた。



9

文と絵 赤波江春奈

My kid's diary

君の顔を

夕 飯をたべているとき、突然「あのみ、」と息子が話し出す。この「あのみ、」

は、なにか真剣な話のはじまりの合図。「あのみ、ぼくさ、じぶんの顔、あんまり好きじゃないんだよ。もうすこし、しゅーってしたい。鼻も丸くてなんか嫌だし。口の形もあんまり好きじゃなくて」

あまりにも予想外な話で、母の脳内はパニック。

えーって、そういうの気にするのは、10代の女の子じゃないの？ 7歳の男の子でも自分の見た目を気にする？ もしかして誰かに外見をからかわれたとか!?

よく話を聞いてみると、同じクラスの○○君の顔を、自分はとてもカッコいいと思っていて、その○○君みたいになりたいそうだ。

「お母さんは子どもの頃は、誰かになりたいとか思わなかったの?」

「お母さんも子ども頃は、そういうのあったけど……大人になったら、あんまり気にならなくなるよ。だって、変えられないし、顔（整形という手段の話はここでは封印した。）」

「へーそうなんだ、大人つていいね」

「君はお母さんに似てるじゃん。お母さんと同じ丸い顔、お母さんと同じ丸い鼻。その口の形は、お父さんとそっくり。そのままじゅーぶん素敵だと思わない? 君はそのままでもいいんだよ。気にしなくていいよ!」

息子は微妙な顔をして「うーん、お母さんの顔は素敵だし、ぼくはお母さんの顔が好きだけど、それは別の話なんだよね……」と

そうか、別の話なのか……。

わたしはなんと答えてあげるのが正解だったのか、数ヶ月ひとりモヤモヤ考えた。

わたしの顔はわたしのもので、息子の顔は息子のものだ。似ているけれど、交換も同化も不可。彼はわたしのいないところで、毎日、人生を、その顔でやっていく。

「お母さんと似てるって素敵」は、ずいぶんとの外れの言葉だった。

自分の外見を気にするのは、他人の目が気になり始めたということ、それはそれで成長のひとつだから、「そんなこと気にしなくていい」と一蹴するのはよくなかった。

「君はそのままがいい」という言葉は、それで苦しいところから抜け出せることもあるけれど、逆に子どもを「いま」に閉じこめて、縛りつける言葉になるかもしれない。

使いだころを間違えと、前に進もうとする力をそぐ、こわい言葉になってしまおう。

ほんとうに悪いのは、他人による外見のジャッジ、誰かと誰かを比較して片方を貶めること。それで得る優越感。そして、人と自分を比べて悲しむこと。そういう視野の狭さといふ心貧しさ。そんなことを、おしえてあげたいと思う。いや、そんなに急いで、正しい答えを真正面から与えなくてもいいのかも。

赤ちゃんのときから変わらない寝顔を見ながら、ひとり考えている。